

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～30頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の（次ページ）をクリックするか、キーボード上のキーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が真途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

レッドサンブラッククロス4
作戦グスタフ発動

9 予兆

10 道義的支援とその結末

11 行動開始

レッドサンブラッククロス5
第二戦線崩壊

12 小手調べ

13 〈ブルー・アイス〉作戦

14 われらの海

レッドサンブラッククロス6

インディアン・ストライク

279

15 前夜

281

16 ヒート・アップ

333

17 アソルト・ランディング

413

レッドサンブラッククロス7 バーニング・アイランド

433

18 豹鬼奮迅

439

19 スプレndeッド・ビッグ・ウォー

531

図版一覧

〈兵器〉

メッサーシュミットMe 262	142
フォッケウルフ・タンク152H	143
烈風	146
ブラックバーン・ファイアブランド	147
イラストリアス級	151
バルバロッサ級	154
シャルンホルスト級	155
神州丸級	211
三浦級	213
レパント級	221
テリヴィーレ級	225
ヴィットリオ・ヴェネト級	226
カイオ・デュリオ級	227
紀伊級	242
白根級	243
石狩級	244
キング・ジョージV級	245
富嶽	305
戦時標準船I型	322
戦時標準船II型	323
旋風	337
アラド Ar 234C - 9LRKII空中警戒管制機	343
ドルニエ Do 435A戦闘機	349
ピスマルク級	361
天城級	367
吹雪級	374
阿賀野級	375
V号中戦車H型バンテルII	474
一式中戦車改	475

〈地図〉

世界勢力分布：1948年7月現在	10
世界勢力分布：1948年9月現在	120
世界勢力分布：1948年11月現在	434
日英主要海上交通路及び艦隊兵力展開：1948年10月現在	100
ゴアにおける独軍の兵力展開：1948年10月11日現在	133
T作戦主隊のゴア空襲：1948年10月11日0709～	157
インド洋戦況図：1948年10月	170
ソコトラ島概況図：1948年10月現在	192
第二次印度洋海戦 1：両軍の初動 1948年11月5日1332時	248
第二次印度洋海戦 2：主隊戦闘加入 1948年11月5日1345時	258
第二次印度洋海戦 3：レパント沈没 1948年11月5日1400時	266
インド洋戦況図：1948年11月現在	316
日英同盟軍ソコトラ島侵攻計画：1948年11月	326
ソコトラ沖夜戦 1：1948年11月7日23時5～35分の状況	386
ソコトラ沖夜戦 2：1948年11月8日0時26分の状況	404
ソコトラ沖夜戦 3：1948年11月8日0時40分の状況	408
ソコトラ失陥 1：欧州連合軍の防衛配備 1948年11月現在	330
ソコトラ失陥 2：上陸第1日の戦況 1948年11月8日	460
ソコトラ失陥 3：上陸第3日の戦況 1948年11月11日	540
ソコトラ失陥 4：上陸第5日の戦況 1948年11月13日～22日	560

〈図表〉

大ドイツ帝国軍事組織編組：1948年5月現在	12
大ドイツ帝国軍事組織編組：1948年10月現在	122
日本帝国軍事組織編組：1948年5月現在	13
日本帝国軍事組織編組：1948年10月現在	123
日英同盟軍：〈T作戦〉戦闘序列 1948年10月2日発令	135
ドイツ・アーリア支隊戦闘序列：〈T〉作戦後	165
日本軍事通信諜報組織概略図：1948年	175
日英同盟軍インド方面海軍部隊戦闘序列：1948年11月現在	177
ドイツ帝国における戦略物資の状況 1948年下半年期	183
ドイツ東方艦隊（欧州連合軍）戦闘序列：1948年11月現在	203
ドイツ第15装甲擲弾兵師団	310
ドイツ第15装甲擲弾兵師団第115装甲連隊第2大隊編成表	313
海軍第1聯合陸戦師団編成表	436

装帧
山影麻奈

レッドサンブ ラック クロスⅡ

レッドサンブラッククロス4

作戦グスタフ発動



西半球

凡例

- | | |
|---------------------------------|-----------------|
| ■ 大ドイツ帝国領域 | ▨ 日本帝国(日英同盟) 領域 |
| □ 〃 寄り中立国 | ▩ 〃 寄り中立国 |
| ■ フランス領ケベック
(1945年併合、欧州連合領域) | --- ウラル戦線 |

世界勢力分布

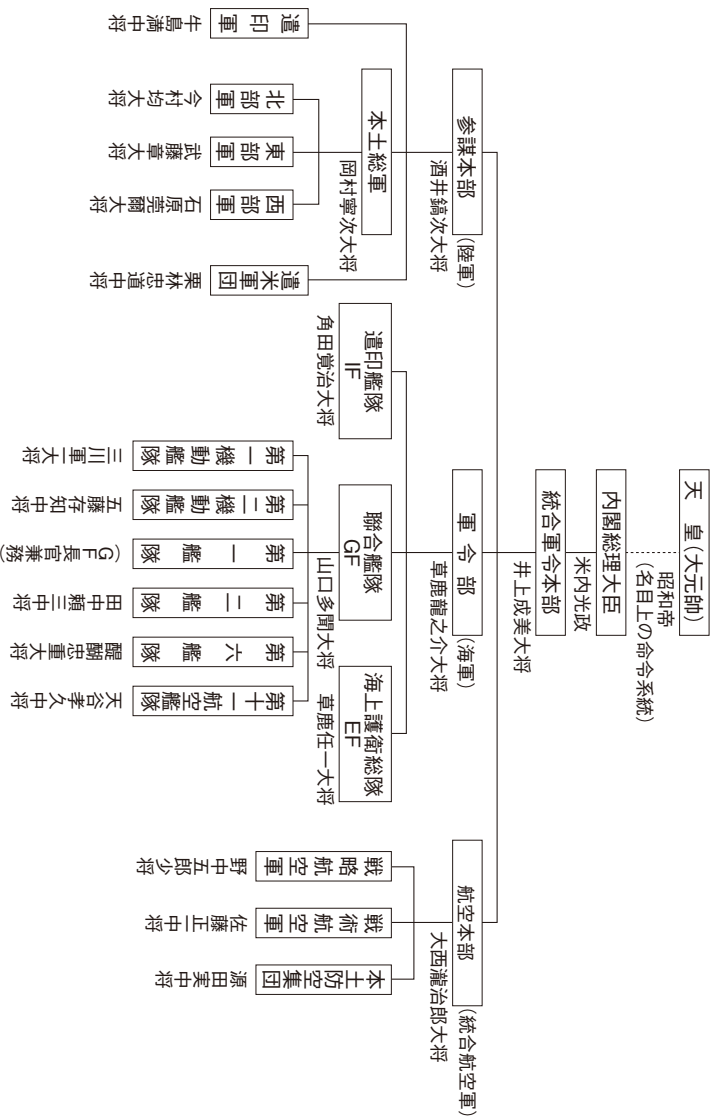
1948年7月現在

Just before The World War III, Stragetical Situation : July.1948 present



東半球

日本帝国軍事組織編組：1948年5月現在



9

予兆

「報告書に目を通す際、私はそれがあたかも一冊の文学書であるかのように緻密な注意を払って読む。

貴下はそのことをじゅうぶんに承知しているはずだ」

——ナポレオン・ボナパルトよりベルチエ参謀長宛の手紙（一部）

1 ナイト・レイダー

インド洋

一九四八年八月一七日

昼過ぎあたりから異音をたてるようになっていた右舷側機関の修理作業は二時間ほどまゐりようやく終わり、ドイツ帝国海軍少佐ヘルムート・シュナウファーの指揮する艦は星空のもとで再び戦鬪力を取り戻した。

機関長から修理完了の報告を受けたシュナウファーが航行再開の命令を発すると同時に、あちこちで復唱があり、それまで沈黙していた機器類が息を吹き返していった。なんら頼るべきものがない大洋のただなかで過した漂泊の半日は、乗員の大半に大きな精神的疲労を与えているはずだったが、少なくとも、いまの段階でその影響は感じられない。乗員たちは、ただ倦怠と緊張を友として過ごした環境からの脱出を喜び、それを任務への精励であらわしているのだった。

照明の消された艦橋の間に、シーアンカーが巻き上げられる音が響いた。その響きは、再始動された機関よりよほどけたたましく、神経にさわるもののように感じられた。

「新たな発信はないのだな？」

海図盤の傍らに備えられた艦内電話の受話器を握ったシュナウファーは尋ねた。

「ヤー、ここ一時間ほど、傍受なし」艦橋の背後にもつけられた通信室からの応答は明確だった。「少なくとも、最初に傍受した周波数での発信は全く行われていません」

「ナウシカアに反応は？」

「現在までのところ逆探知装置に傍受なし。こちらが捉えた不審電波はレーダー波ではありません」

「御苦労、傍受を続けてくれ」

シュナウファーは送受話器をフックに戻し、そこだけは照明のともされている海図盤にひろげられた海図にかがみこんだ。

「敵艦隊でしょうか？」

さきほどから一緒に海図をのぞき込んでいた副長がさぐるように尋ねた。

「わからん」

シュナウファーは硬い声でいった。

「何らかの任務を帯びた戦闘艦隊なのか、輸送船団なのか、それとも不注意な独航船なのか。それを確認するの

が我々の任務だ。周囲警戒を厳にせよ」

「はあ」

副長は肩をすくめそうになるのをかろうじてこらえつつ、白けた声でうなずいた。肩などすくめたら、部下にどのような心理的影響を与えるかしたものでない。

シユナウファーは海図をにらんだまま、わずかに歯をむきだした。

ヘルムート、あなたはあまりに実存主義的な人じゃないかと思うの。

この戦争が始まる以前に彼のもとを去った女性性は、別れを告げる際、そのような表現を用いて己の決意を彼に伝えた。大管区指導者の愛娘である彼女は、そうであるが故にさまざまな点で理想的な人格の持ち主ではなかった。彼女は美しく、聡明で、同世代のドイツ女性には珍しいほどに高度な教育を受けていた（ヒトラーはまず女性性に対して兵士の母であることを求めている）けれども、それはあくまで彼女の部分を構成しているにすぎず、人格そのものに内在している欠点を矯正するにいたっていかなかった。

シユナウファーが彼女と出会ったのは三年前、海軍総司令部で開かれた研究会に出席するため訪れたグロ

ス・ベルリンの夜のことだった。海軍に兵器を納入しているメーカーのオーナーが開いた夜会で、所在なげにしていた整った風貌の海軍大尉に、彼女がひどく魅力を感じたことがはじまりであり、少佐へ昇進し、新たな任務についたシユナウファーがひどく多忙になってしまったことが終わりを呼び寄せた。彼女には、自分より他のなものかを優先させる男が理解できなかったのだ。

いま、フールドがかぶせられたライトに照らし出された海図をにらみつつ、シユナウファーはそのことをわずかに思い出していた。あまりに実存主義者。たしかにそうかもしれない。軍務に対して熱心であることについては人後におちないつもりだが、であるからこそ、人間としてはいびつになっているのかも。自分は最後まで彼女へ本物の情愛を抱くことはできなかったが、あるいは彼女は、自分のことを的確に把握していたのかもしれない。いや、または。ああ、なにをばかなことを考えているのだ、俺は。

シユナウファーはわずかに頭をふり、意識を海図に集中した。そこには彼の艦が航行しつつあるインド洋の一部が切り取られ、航海長によって引かれた航路の線と、航行中に傍受した不審電波源の推定位置が書き込まれて

いた。周囲一〇〇哩^{マイル}あまりの海面には陸地のたぐいは一切存在しない。

シユナウファーは不審電波源の推定位置をみつめた。

通信班の報告によれば、それは約一時間おきに電波を発信しているということだった。電波が飛んできた方位から想定すると、それは、インド西岸をはるかに離れた洋上を一〇ノット程度の速力で南下しつづつあるらしかった。彼の艦を中心において考えるならば、西方約六〇哩付近だった。艦の巡航速力から考えると、最悪の場合でも、二時間以内に含在海域へ到達できるはずだった。

果たしてなんだろうか、シユナウファーは迷った。副長に対してさきほどいつてのけたほど、彼の内心は自信に満ちていたわけではないからだった。

なんともあやしげな不審電波源だった。その正体がなんであるか、いくつもの可能性が考えられた。

コロンボに向けて航行中の敵船団。哨戒中の艦隊。故障して浮上航行中の潜水艦。危険をおかし、独航で安全な港湾をめざしている商船。あるいは、あるいは。

敵による傍受をさけるため、レーダーはよほど重要な局面でなければ使用できないから、受動的な搜索——電波傍受と肉眼という第一次大戦当時と変わらぬ手法で不

審電波源の正体を明らかにするほかなかった。敵にこちらの意図や位置、兵力等を察知されぬためとはいえ、劇的な効果の期待できる手法ではない。この問題を解決するため、シユナウファーのような若手指揮官たちは探知距離の長い赤外線探知装置の開発と配備を希望していたが、現在までのところ、その願いはかなえられていない。長距離探知が可能な実用的な（つまり、信頼性が高く、艦艇に搭載可能な程度にコンパクトな）赤外線探視装置の開発は、いまだ技術的にひどく難しいものであるからだ。このため、ドイツ帝国海軍の艦艇には（たとえ彼女がシユナウファーのような指揮官に率いられていてさえ）長距離で敵を捕捉できる赤外線探視装置は搭載されていない。帝国軍——陸海空軍共通のプロジェクトとして進められている〈ヴァンパイア〉計画で艦艇用赤外線探視装置の開発は行われているが、いまのところ、戦艦や重巡以外の艦に装備可能な大きさのものは完成していなかった。性能的にも問題がある。射撃レーダーの実用化以後、夜戦においても戦闘距離が増大の一途をたどっているため、どう甘く見積もっても一〇〇〇〇メートル程度までは見通せなければならなかったが、現実には、よほど大型の赤外線投光器を用いても三〇〇〇メートル

がいいところだった。将来的には、こちらから赤外線を発してその反射をとらえるアクティヴ型ではなく、相手の発する赤外線を捕捉するパッシヴ型暗視装置を主流とすることによって捕捉距離の増大をはかるという構想も存在したが、いまはまだ実験室段階にもいたっていない。

シユナウフアーは海図をみつめつづけていた。ソコトラの東方艦隊司令部から彼に与えられた命令は積極的な哨戒活動だった。命令には、機会あらば、通商破壊を実施すべし、ともあった。

通商破壊か、シユナウフアーは脳髓^{のうすい}ではない部分でわずかな反抗心をおぼえて口元をゆがめた。我が軍の上層部はありとあらゆる兵器を潜水艦のように使おうとする。もちろん、通商破壊が海軍の大きな任務であることじたいは否定しないが、なにもかもそれに投入するというのはどうだろう。強大な戦闘力をもっていた〈フリードリヒ〉が開戦からさして時がたたぬうちに喪われた原因は彼女がともに行動していた〈ティルピッツ〉以外から有効な支援を与えられなかったことにある。もちろん、場合によっては盗賊のようにふるまうことも必要だが、重騎兵は、まずその本来の任務でどう用いられるかが考えら

れねばならないのではないか。

シユナウフアーが内心で抱いているこうした思いは、彼のようなドイツ海軍の若手中堅士官たちのなかで徐々に高まっている海軍というもののへの認識の変化が影響を与えていた。

シユナウフアーと同世代の士官たちのあいだでは、祖国の変貌にあわせて、海軍もまた変化すべきだという認識が一般化しつつあった。ドイツが欧州のランドパワーから世界帝国へと発展したことにあわせるべきだ、そういうことだった。

ひらたくいってしまえば、過去のドイツにとり、海軍とは積極的にもちいるべき軍勢力ではなかった。ドイツにとつての海軍は、あくまでも陸軍の作戦を支援するため、敵国（つまり英国）の海軍作戦を妨害するために存在していた。たしかに過去の戦争でドイツ潜水艦は長駆外洋へ出撃、英国や日本の船団を攻撃、これに大きな損害を与えてきた。しかし、敵が大量に護衛艦を投入し、執拗^{しつよう}な海上護衛を実施しているかぎり、その効果はおのずと限定されたものとならざるをえなかった。敵の制海覇権を妨害することはできても、奪い取ることはできない。たとえどれほど外洋で艦艇を作戦させていたとして

も、ドイツ海軍の本質は制海権を自力で獲得できない海軍、沿岸海軍なのだった。

過去のドイツにこのような状況を変革しようとした人物が存在しなかったわけではない。

拡大解釈がゆるさるるならば、史上はじめてドイツ人による海軍の建設をこころみた傭兵隊長ヴァレンシュタインらしいの系譜があるといつてよい。しかし、その系譜は、失意の系譜でもあった。ヴァレンシュタインは政争のあおりをうけて暗殺された。二〇世紀ドイツ最大の海軍重視論者であった第二帝国皇帝ヴィルヘルム二世は、当時の英国海軍に拮抗するだけの艦隊をつくりあげようとしたが、結局はそうした彼の意図じたいが大戦をまねく要因のひとつとなり、ついには帝国を崩壊させてしまった。

シュナウフアーがインド洋を進む現時点までのところ、その悲劇的な系譜の末尾に連なっている人物は、現在、デーニッツ元帥がつとめている職務である海軍総司令官の前任者、エーリッヒ・レーダー元帥だった。彼は第二次大戦前にしばらくは戦争を行わないというヒトラーの約束を信じて大規模艦隊拡張計画、いわゆるZ計画を立案、第一次大戦当時のそれに匹敵する艦隊を再建しよう

とした。計画そのものは現在もなお継続されているものの、その立案を指示したレーダーはもういない。ヒトラーが彼との約束を無視して開始した第二次大戦で精魂をつかいはたし、ついにはヒトラーと衝突して辞任してしまった。

その影響だろうか、現在、日米英とのあらたな大戦を遂行しつつあるドイツの海軍は、規模こそ大きくなくなったものの、いまだに本格的な外洋海軍たりえていない。シュナウフアーがさきほどおもったように、たとえば日本海軍ならば水上艦隊の中心にすえたであろう（フリードリヒ・デア・グロッセ）を、孤立無援といつてよい状況へと追い込み、短期間で通商破壊艦としてつかいつぶしてしまった戦例がそれをよく示している。事実、（フリードリヒ）は、そのような使い方をするにはあまりにも高価（軍事的にも、経済的にも）な艦だった。同じだけの費用と資材を用い、何隻か潜水艦を建造したほうがよほど効果があつただろう。事実、海軍部内にも水上艦隊を縮小し、潜水艦隊をさらに拡充すべきだと唱えているものが少なからず存在していた。

シュナウフアーのような士官たちが変革されるべきだと考えているのはいまだ海軍の主流を占めているといつ

てよいそうした意識についてだった。ワイマル共和国の混乱と崩壊、そしてヒトラーによる第三帝国の建設、あらたな大戦、現在の戦争といった環境のもとで育ってきた彼らは、通商破壊に凝り固まった海軍上層部のありように、自分たちとはあいられないものを感じていた。彼らは、ドイツはいまこそ外洋海軍を建設し、他の海軍国と制海覇権を争うべき時期にきていると信じていた。つまり、日本が保有しているような艦艇としても盾としても使うことのできる海軍をもとめていた。欧州を制覇する以前のドイツにとって、それは夢物語だったが、いまや、新大陸にさえその戦線を拡張した第三帝国にとって、外洋海軍は必須のものとなっている、彼らはそう考えていたのだった。

しかし、現実にはシュナウファーのような新たな世代の士官が望む方向にうごいてはいない。(フリードリヒ)の末路が示すように、ドイツ海軍はいまだに通商破壊偏重思想に凝り固まっていた。開戦時、日本の遣印艦隊に対してはほぼ同等の兵力を保有していた東方艦隊も、その戦力的優位を生かして決戦を挑もうとはせず、そのほとんどの保有艦艇をぐくちいさな兵力単位にわけてインド洋全域で作戦(もちろん通商破壊作戦)させている。は

るかドイツ本国では、大西洋からカリブ海にかけての制海覇権を確保すべき艦隊の編成が進められているという噂が戦前から流れていたが、いまのところその艦隊は現実の戦場に姿をあらわしてはいなかった。

「畜生」

誰かが暗闇のなかで突然つぶやいた。シュナウファーは海図に向けていた視線を声のした方へとあわせた。

「これじゃあ、なにもみえんぞ」

副長だった。彼は左舷側よりの窓にはりつき、双眼鏡をかまえて夜のインド洋へ視線を向けつづけていた。

シュナウファーはわずかに苦笑をうかべ、艦内時計をみた。行動再開から一時間半あまりすぎていた。どうやら彼はついぶんないあいだ海図をにらんでいたらしい。気がつけば、無理な姿勢をとっていたことによる痛みが腰のあたりにあった。

シュナウファーは背筋をのばし、左手で腰をもんだ。首を左右にふり、首筋にはりついているような緊張を取り去ろうとする。艦内電話が鳴ったのはその時だった。

シュナウファーは送受話器をすばやくつかみ、応じた。

「こちらは艦長」

「通信室です。不審電波を捕捉。無線交信。本艦の西方

電波はなおも発信中。かなり近い」

「方位と距離はわかるか？」

「現針路でもうすこし待ってください。現在標定中」

「よし、判明し次第ただちに報告しろ」

シユナウファーは送受話器をフックに戻し、彼に注目している艦橋の男達にざっと視線をはしらせたとで命じた。

「総員戦闘配置。周囲警戒を厳にせよ」

「ヤー」

間髪をいれずに副長が応じ、海図盤の脇へ走って送受話器をにぎり、全乗員に向けて発した。

「艦橋より全艦、総員戦闘配置。周囲警戒を厳にせよ。」

くりかえす、総員戦闘配置、周囲警戒を厳にせよ」

彼は自分の伝達した警告のしめくりとして、電話の脇にもつけられた警報機のスイッチを親指で押し込んだ。

その夜、インド洋を独航する日本郵船所属貨物船（宝永丸）が何度も無線交信をおこなった理由は必ずしも乗員たちの不注意ばかりが原因であったわけではない。戦前に策定された日本海軍の船団護衛指揮教範にも大きな責任があった。この教範は、周囲を有力な護衛艦艇に囲

まれて航行する船団を想定してつくられたもので、なんらかの原因によって独航のやむなきにおちいった船舶は、一定時間ごとに無電発信を行い、早期に護衛部隊との連絡を回復すべきであると定めていた。昨夜、深夜航行のあいだに船団本隊からはぐれてしまった（宝永丸）は、今日一日、出会うべき仲間をもとめ、規則どおりに発信を続けてきたのだった。いまのところ返信はない。護衛部隊は彼女の発信を傍受し、一部の艦艇を救援に向かわせていたが、彼らの方はまことに軍艦らしい完全な電波管制が規則に定められており、返信を発信できなかった。

「返信ありません」

通信室からの報告は今日一日まったく変化がなかった。ボーキサイトをバラ積みした排水量三五〇〇トンの貨物船、その船橋にたっていた船長は、報告をきき、内心で海軍をのしつた。彼自身もまた日本の商船士官の例にもれず海軍の予備士官だったが、海軍軍人としての経験は商船学校でうけた教育以外、ほとんどない。どちらかといえば、開戦以来、妙に態度の大きくなった海軍にたいして反感すら抱いていた。

「あいかわらずですな、キャプテン」

一等航海士が不安の強くこめられた口調でいった。言

外に、我々は海軍に見捨てられたのではないか、というおもいをつたえていた。

「軍艦は無電をつかえない」

船長は暗い海面を見つめたまま応じた。

「おそらく、最初の発信でこちらの位置を特定しているさ。明朝までには合流できるはずだ」

「ええ、そうですね」

二人とも、自分たちが話している内容が願望に近いものであることを承知していた。

「いまのところは」船長はいった。「周囲見張をしつかりやって、なるべく南へ逃げるほか——」

スピーカーが鳴った。

「後部見張より船橋。本船右後方二〇度付近空中に何かいます」

「何かとはなんだ」

素早く船内電話にとりついた一等航海士が叱った。

「報告になってないじゃないか」

そのあいだに船長は船橋の右脇にもうけられた見張所へ出ていた。見張員の傍らに立って双眼鏡を構え、報告された方位の空中へ双眼鏡を向ける。

確かに、空中に何かが存在していた。飛行機ではない。

飛行機にしてはあまりにも巨大で、速度が遅すぎた。若い頃に、船長はそれと同じようなものを霞ヶ浦で見物したことがあった。

「まさか」

船長はうめいた。まさかそんな。

「目標は独航中の商船」見張員が報告した。「船尾に日章旗。日本船です」

シュナウファーもそれを双眼鏡で確認していた。日章旗まで見分けることはできなかったが、その煙突がひどく目立つスタイルから、日本船であると判断できた。

「打方用意」

シュナウファーは命じた。

「射撃指揮所、あの船のアンテナ・マスト周辺をねらえ。命令あり次第打方はじめ」

「ヤー」艦長達にかわって送受話器を握った電話員が彼の命令を復唱した。シュナウファーは続けて命じた。

「信号手、商船に対し発光信号。本文。こちらはドイツ帝国海軍空中巡洋艦L101。貴船を拿捕する。無線機の使用を停止し、全乗員は一分以内に船外へ退去せよ。救命艇の使用、航法用具、食料・飲料水の持ち出しはこ

れを許可する。当方の指示に従わぬ場合、攻撃する」

「ヤー」

信号手は命令を了解すると同時に、発光信号機を操作した。双方の平面距離はとうに一〇〇〇メートルをきっていたから、見逃すことはありえない。

夜空にくろぐろとした巨体を浮かべている飛行船の下面から信号が発せられた。無線の使用禁止と総員退去を求めていた。

「いったい、いまはいつの時代なんですかね」一等航海士があきれかえったようにいった。「ガキのじぶんに、ヒンデンブルグ号がきたあと、飛行船の噂はとんと聞きませんでしたが」

「知るか」

船長はうめいた。

「向こうの指示に従いますか？ あの花飛行船——空中巡洋艦とやらの」

「ほかになにができるというのだ？」

しかし、その指示が伝えられる前に、事態を知った『宝永丸』の通信士は無電発信を開始していた。その電波は、当然、空中のドイツ飛行船に傍受された。

通信室から報告が入った。

「商船は無電を発信。現在位置を通報中らしい」

「打方はじめ」シュナウファーは命じた。「ただし、一発だけだ」

ヘリウムガスで膨らんだいくつもの気囊をおさめた長大な葉巻形の船体、その下部に三カ所もつけられた構造物で命令に応じた変化が発生した。まず、最前部の艦橋その他の指揮設備がつけられた構造物の下部につきだした測距儀と照準望遠鏡が旋回と角度変化をおこし、商船に指向された。続いて中央構造物の下面に装備された単装砲塔が旋回し、射撃指揮装置が伝えた方位と角度をとると同時に、発砲炎を空中へ吐き出した。

空中で発砲の閃光がきらめいた一瞬ののち、船橋の後方で爆発が起こった。突然の、少なくとも船長にとってはその感じられた砲撃により、船橋の後方にもつけられていたアンテナ・マストはその基部が吹き飛ばされた。

根本の支えを失ったマストは、空中線に張力限界以上の力をくわえつつ、魔女の哄笑のような音を響かせて右舷側へと倒れ、水面をたたいた。飛行船は、被弾面積の

少ないアンテナ・マストではなく、その基部を攻撃することでの商船から通信機能を奪った。

砲弾が炸裂した瞬間、船長は自分の意志や肉体ではどうにもならぬ事態に突然まわられた人間が常にそうであるように、まったく何の考えもなしに、ある意味で赤子のような精神状態でその衝撃を受け入れた。爆音とほぼ同時におそってきた衝撃によって彼は船橋の床に打ち倒され、ほんのわずかな時間、意識を失った。彼が意識を取り戻した時には、一発の砲弾がもたらした暴力は終結し、船上には破壊と混乱だけがのこされていた。

「ドイツ飛行船より信号」頃から血を流している見張員が報告した。「ただちに退船せよ。繰り返す、ただちに退船せよ」

船長はどこか弛緩した表情を浮かべたままの一等航海士にたずねた。「何人やられた」

「ええ、いや、その」

航海士はそこまでいって自分が痴呆ちほうのようであることに気づき、顔を赤くして船内電話の送受話器を握り、各部に報告を求めた。

信号手が報告した。

「日本船より返信、われ、これより退船開始」

「最初から素直に従えばよいものを」副長があわれむような声でいった。

「道理はそうだがな」シユナウファーは船橋の後方で火災をおこした商船をみつめたまま誰にたいするでもなく口をひらいた。「連中も船乗りなのだ」

「まあ、それは理解できます。確かに」

副長は弁解するようにうなずいてみせた。彼は内心で艦長にそのような面があったことに好意的な驚きをおぼえていた。

「我々は、飛行船がこの大戦でも有効であるのを証明できたこと、それを喜ぶべきなのでしょう」

「なのだろうな」シユナウファーはこたえた。

「ああ、そう思ふべきなのだろう」

2 空中戦艦

——兵器としての飛行船、一九〇〇—一九四八年

比重の軽いガスを気囊につめた飛行物体にエンジンと舵をとりつけ、空中を自由に飛翔する。要約してしまえば、飛行船とはそれだけのものだ。この飛行機械は、一九世紀末のやがては航空機にいたる空への情熱、その

ひとつとして構想された。

構想を実用化したのは、この時期、新興工業国としてその勢力をのびしていたドイツ第二帝国だった。開発を主導し、ついには実用化したのは早くから飛行船の構想を抱き、独自の研究を進めていたフルディナンド・フオン・ツェペリン伯爵——ヴェルテンベルグ出身の騎兵将校で、普仏戦争の勇士だった。本来の彼はその出自と能力と功績により順風満帆の軍人としての生涯を送ることが可能だったが、戦争についてのあまりに正直な意見を皇帝へと送りつけた結果、五二歳で退役に追い込まれてしまった。

しかし、退役はツェペリンの人生の終わりを意味するものではなかった。軍務からの解放は、彼に長年の夢であった大型硬式飛行船の研究に全精力を傾けることを許したからだ。

先駆者の失敗を受けて飛行船開発にとりくんだ彼は、一九世紀最後の年、フリードリヒスハーフェンで初の本格的な硬式飛行船LZ1を進空させた。

とはいえ、これによって飛行船がシステムとして完成したわけではなかった。

飛行船の操船はひどく難しかったし、推力をあたえる

機関はあまりにも非力で、信頼性が低かった。また、設計も洗練されておらず、構造的な脆弱性をたぶんに内包していた。飛行船を新世紀の兵器としてのみとらえることを好んだツェペリンは、飛行船艦隊の創設を要人たちへ説いたが、飛行船の兵器としての採用は遅々としてすすまなかった。このため、空を飛ぶものの有効性に軍人の多くが気づいていながら、第二帝国が兵器として採用した飛行船は、LZ1の進空が成功してから一〇年間でわずか三隻だけ、それもツェペリンの古巣である陸軍がなかば義理で購入したという有様だった。

ツェペリンはこの窮状を打開すべく、史上初の商業航空会社、ドイツチェ・ルフトシファルツ・アクテン・ゲゼルシャフト——ドイツ飛行船輸送会社、略称DELAGを創設した。帝国の将来を担う兵器として開発したものを商業用途、それも遊覧飛行などにもちいることは彼の本意ではなかったが、まず国民に飛行船というものを十分に認識させることが重要だと判断したのだった。

結論からいえば、ツェペリンのこのもくろみはほぼ成功した。多くのドイツ人は、新興帝国の国民らしく、新たなものの、巨大なものに熱狂した。運賃はあまりにも高価で、輸送力も限られたものだったが、国民は、第二帝

国の力を代表するような飛行船の雄姿とそれを精力的に開発するツェペリンに声援をおくった。

また、(皮肉なことに) ツェペリンが商業輸送に乗り出した頃から、飛行船をとりまく政治的環境も徐々に変化をみせていった。これまで飛行船に冷淡といってよい態度をとり続けていた海軍が、積極的な態度をとり始めたのだった。

理由は、ヴィルヘルム二世皇帝のもとで(やがては第一次大戦の直接的原因となる)海軍拡張計画を推進していたアルフレート・フォン・ティルピッツ元帥が、飛行船の持つ偵察兵器としての可能性に着目したことにある。

ティルピッツは、偵察巡洋艦に倍する速力で海面を広い範囲にわたって見下ろしつつ航行できる飛行船の有効性により一九〇六年までには気づいていた。しかし、彼の第一の任務は強力な水上艦隊を建設する点にあったこと、飛行船艦隊、およびその運用施設の建設に必要とされる莫大な費用をどう調達するかが問題となり、海軍兵器としての採用が遅れた。じつのところティルピッツは(飛行船の有効性は認めつつも)最後の最後まで水上艦隊の建設を優先しようとしたが、皇帝から大衆世論にいたる圧力と、諸外国海軍での飛行船採用をみて、一九一二年、

ついにツェペリンの望むかたちでそれを用いることに決した。彼は海軍飛行船部隊^Mの編成を命令、カール・エルンスト・ハーン^L中佐に率いられた最初の要員をDELAGでの訓練に送り出した。海軍は第一次大戦が勃発^{はつぱつ}する以前に何隻かの飛行船をツェペリンに注文したが、うち二隻(L1、L2)はそれぞれ事故で失われたため、一九一四年の開戦時に実働状態にあったのはL3ただ一隻だった。

当初は貧弱だった海軍飛行船部隊だったが、開戦によって予算等の制約が取り除かれたことにより、以後は急速に発展した。彼らはただ一隻の実働艦L3をもつて開戦後ただちに北海の哨戒を開始、他の新造艦——性能が向上し、航続距離、速力、搭載力の増大した艦が戦列にくわるにつれ、より積極的な作戦を行うようになった。一九一五年一月一九日の深夜に実施された英本土東部海岸に対する初爆撃はその嚆矢^{こし}だった。その後、さらに戦力を拡充した飛行船部隊は同年八月一〇日午後、英帝国の首都たるロンドンを史上初めて戦場とした。彼らは四隻の飛行船(五隻で行く予定だったが、一隻は機関不調で任務を中止した)でロンドンを襲い、七トンあまりの爆弾を投下したのだった。ツェペリンの夢は実現された。

飛行船は遊覧船から偵察機へ変身し、ついに初の戦略爆撃機へと発展した。

だが、このロンドン初爆撃が、攻撃兵器としての飛行船の絶頂でもあった。その後ドイツ海軍は兵力拡充に努力し、編隊を組んだ飛行船艦隊による英本土爆撃は戦争の日常的光景と化してゆくが、性能と戦力は向上の一端をたどったにもかかわらず、飛行船が持つ兵器としての価値は急速に下落していった。英国が、対空監視網と高射砲、迎撃戦闘機を連動させた防空網を本土に張り巡らせて対抗したからだ。ドイツ海軍は飛行船による爆撃を夜間に限定することでこれに対抗したが、最大到達高度が向上した高射砲や、実用上昇限度のあがった戦闘機の迎撃から逃れることはできなかった。飛行船の損害は徐々に上昇カーブを描きはじめ、戦果は低下した。ドイツ人自身も、夜間戦略爆撃の主力を飛行船から実用化されたばかりの巨人爆撃機へとかえつつあった。

大戦の最後の年となった一九一八年、ドイツ海軍は全長約二一メートル、積載量約四四トン、七基のマイバツハM b IV aエンジンによって時速一三一キロあまりの最大速力を発揮するL70級大型飛行船を実戦配備していたが、これほどの性能をもつてしても、攻撃兵器として

戦局に大きく寄与することはかなわなかった。戦後、ヴェルサイユ体制のもとでドイツの大型飛行船建造は禁止されたが、これは多分に戦時中の恐怖感の裏返しとしてのものであり、飛行船がいまなお有効な兵器であると感じる者は（たとえドイツ人であつてさえ）そう多くはなかった。

おもしろいことに第一次大戦の戦勝国で飛行船にもっとも大きな興味をしめしたのは日本で、戦時賠償の一部としてドイツから飛行船やその運用施設を接收したが、これとて攻撃兵器としての可能性に注目したからではなかった。日本人は、彼らの海軍が金科玉条きんこぎよくとしていた漸減邀撃思想ぜんげんようげきを実現するために長距離哨戒能力の向上につとめており、その目的に飛行船は合致していると考えたのだった。ただし、彼らのこうした判断も長続きはしなかった。大戦によって実用化された航空機が、戦後も進歩と発展を続けたからである。

こうして、兵器としての飛行船は終焉しゅうげんを迎えたかにみえた。戦後、戦時中に死亡したツェペリンの遺志をついで飛行船事業をついだフーゴー・エッケナー博士がおもに旅客輸送手段としてこれを発展させようとしたが、ナチスとの対立、そして一九三七年五月六日、合衆国の

レイクハーストで起こった巨大飛行船（ヒンデンブルグ）の爆発炎上事故によって打撃を受け、二年後に始まった新たな大戦がそれを決定的なものとした。第三帝国には、飛行船を兵器として用いるつもりはなかったし、国民の誰も、豪華客船をさらに高級にしたような飛行船旅行を楽しむ余裕など失ってしまったからだった。エッケナーは彼の反ナチ的姿勢を嫌っていた国家宣伝相ゲッベルスによって社会の表舞台から引きずりおろされ、誰の目にも、飛行船がすべての意味で終わったように思えた。

この状況に変化が発生するのは英本土に続いてモスクワが陥落し、第三帝国がついに西欧・東欧・欧露のすべてを支配した一九四四年のことだった。この年、第二次大戦の戦訓を調査研究していたドイツ海軍総司令部の参謀たちが、彼らの海軍が持っている致命的な弱点についての報告書をまとめたことがその原因となった。

報告書の要旨は、彼らの海軍で決定的に不足している洋上航空兵力について早急に改善がなされるべきであると結論していた。

これは、ドイツの軍事関係者すべてが納得できる、至極当然の結論だった。大戦中にドイツ海軍がおかした最

大の過誤——英国が（ダンケルク）作戦という秘匿名称を与えて実施した本土脱出を阻止できなかった——は、突き詰めるならば、彼らの洋上航空兵力が皆無に近かった点に起因していた（驚くべきことに、第二次大戦中、ドイツはついに正規空母を保有しなかった）。

なかでも最大の問題とされたのは、長距離洋上哨戒戦力の決定的な不足だった。ドイツは従来これを潜水艦や通信傍受にたよることで行ってきたが、双方ともに実戦ではさまざまな制約がつけられ、はっきりと敵情をつかむことはひどく難しかった。将来に（つまり合衆国との戦争に）備え、たとえ大西洋の真ん中でも、積極的な航空哨戒を行える能力を持つ必要がある、報告書はそう唱えていた。

この報告書の唱えている内容は誰にとっても明確だった。海軍というものにはたいしてほとんど無理解であるアドルフ・ヒトラーもその例外ではなかった。彼はこの報告書を目を通すと両手で机を叩き、総統官邸を訪れていた海軍高級参謀たちに一時間あまりも演説をぶったのち、君たちの提案を具体化するように、と命じた。

飛行船の意外な復活はここに始まった。もちろん、ドイツ海軍部内の少なからぬ者たちは空母こそ最良の解決策

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。